

『韓国語教育研究』(第12号)別刷

ISSN 2186-2044

【研究論文】

相互行為における「이게」と「그게」の機能  
— 「質問-応答」の連鎖に注目して—

権 賢貞

日本韓国語教育学会

2022年9月

# 相互行為における「이게」と「그게」の機能 —「質問-応答」の連鎖に注目して—

権 賢貞

本稿では、韓国語会話のなかで「이게」と「그게」という言語表現が相互行為を組織する上でどのような働きをしているかを、会話分析(Conversation Analysis)の手法によって分析する。「이게」と「그게」は、情報を求める「質問」に対して端的な応答を提示しない際に用いられている。そのような状況において「그게」は、直前の質問に対して端的に答えられない事情を伴うが、それでも相手の質問に答えることに取り組むというスタンスを示している。一方、「이게」は、先行する質問および相互行為と関連して応答者が直接的に得た情報や知識を用いて、当該の質問に答えるという主張を標示していることを、本稿は明らかにする。加えて、韓国語の表現を具体的な相互行為のなかで言語使用者の視点から捉え直すことの意義を、韓国語会話教育との関連で考察する。

## 1. はじめに

本稿では、韓国語会話のなかで「이게」と「그게」という言語表現が相互行為を組織する上でどのような働きをしているかを、会話分析(Conversation Analysis, 以下 CA)の手法を用いて実際の会話を綿密に分析することを通して明らかにする。

韓国語教育において「이게」と「그게」という表現は、初級のテキストの早い段階で教えられる。具体的には、「これはなんですか」「それは〇〇です」という「質問-応答」のやり取りを提示し、指示代名詞の「이것」と「그것」を教える際に、「이것이」と「그것이」の縮約形として主に会話で用いられると説明される。一方で、実際の韓国語会話において「이게」と「그게」は、本稿で示すように、直前の「質問」に対する受け手のスタンスを表す際にもしばしば用いられる。

このような指示表現ではない「그게」を、金(2011)は、より円滑なコミュニケーションを遂行するために意図的に用いられる「談話標識(discourse marker)」の一つと取り扱っており、談話標識としての「그게」には「ためらい」、「話題の再提

示、「(思考中の)時間かせぎ」の意味機能があるとした。このように、金(2011)は、談話における「ユゲ」の機能に焦点を当てているものの、分析対象としているのは、実際の会話ではなく、書籍から抜粋した会話、すなわち作家により作られたやり取りである。そのようなやり取りは、むしろ日常生活であり得るものだが、会話のなかで「ユゲ」という表現が、話し手によって実際どのような位置でいかに使用されているか、そして当該の表現が受け手によってはどのように理解されるかを厳密に分析するには限界があるように思われる。

そこで本稿は、実際に人々によって交わされている自然会話を用いて、その会話のなかで「ユゲ」が、どのような相互行為の環境で使われているかを提示する。そして、そのような環境で「ユゲ」という言語表現が、会話参加者によってどのように利用されているかを分析する。さらに、本稿は、「ユゲ」と同様の環境で産出されている「イゲ」の使い方も分析し、相互行為における「ユゲ」と「イゲ」の役割を比較する。その比較を通して本稿は、相互行為における「ユゲ」と「イゲ」の機能を、会話参加者の視点から捉え直す。

## 2. データと分析方法

本稿では、筆者が収集した会話データのなかで「イゲ」と「ユゲ」という表現が使用されている電話会話を分析する。また、YouTube に公開されているテレビ番組と芸能人の YouTube チャンネルの映像のなかで「イゲ」と「ユゲ」が産出されている、二人以上が参加している会話も分析する。

それらの会話データの転写は、Jefferson によって開発された転写システムをもとに、日本語向けに整理された好井・山田・西阪編(1999)を主に参考としている(稿末の転写記号を参照)。電話会話のトランスクリプトの人名はすべて仮名である。

また、本稿は、CA の手法を用いてデータを分析している。具体的には、Sacks, Schegloff & Jefferson(1974)における「順番交替(Turn-taking system)」「順番構成単位(Turn construction unit: TCU)」「TCU の完結可能点(Possible completion point)」と、Schegloff(2007)における「連鎖構造(Sequence organization)」という CA の基本概念に基づいてデータを分析している<sup>1</sup>。

---

<sup>1</sup> CA の基本概念については、串田・平本・林(2017)と高木・細田・森田(2016)も参照されたい。

### 3. 「그게」 と 「이게」 が産出されている環境

何らかの情報を求める質問がなされたなら、その質問が向けられた受け手は、質問者により求められている情報を提示する応答を産出することが期待される (Schegloff, 2007)。また、どのように応答するかは、質問がいかに関わり立てられているかによって制限される (Raymond, 2003, Schegloff, 2007, Schegloff&Lerner, 2009)。言い換えれば、質問の受け手は、相手の質問の形式に合わせた形で答えることが期待されるということである。

【断片 1】を用いて説明すると、1・2行目で S は、E に「뭐 하고 있었어.」と尋ねてから、E の応答を待たずに、次の「니 집이여?」という質問を産出している<sup>2</sup>(「→」で示している部分)。

#### 【断片 1】 S&E\_190512\_3

- 1 S:→ .hhh ~~ㄱ~~아니 근데 뭐 하고 있었어. 니:?~~ㄱ~~(.)니
- 2 → 집이여?
- 3 E: 나?
- 4 S: ~~ㄱ~~응.~~ㄱ~~
- 5 E:⇒ 어. 나 집이야. 나 할 거 없어서 그냥 땡굴땡굴하고
- 6 ⇒ 놀고 있었[어 가지구:::(화요일부터 )
- 7 S: [너 언제 언제부터 가?

それに対する E の応答は、3・4行目の確認のやり取りを差し挟んで5・6行目で産出されている(「⇒」で示している部分)。その答え方を確認すると、まず、E は「어. 나 집이야.」と言い、直近の S の極性質問、すなわち肯定／否定で答えることを要請する質問(「니 집이여?」)に対して端的に答えている。そして「나 할 거 없어서 그냥 땡굴땡굴하고 놀고 있었어 가지구:::」と言って、1行目における S の最初の質問、つまり「何」という疑問詞を含む「뭐 하고 있었어.」という質問に答えている。

<sup>2</sup> 【断片 1】は、S(20代、女性)が中学の同級生の E(20代、女性)に電話をかけて録音した会話の一部である。【断片 1】の直前で二人は、録音機で電話を録音するのは不自然だと話しており、その話の直後に1行目の S の質問が産出される。

このように、Eの応答は、Sの質問の形式、すなわち極性質問と疑問詞を含む質問により制限され、それに合わせた形でなされている。また、Eは、直前のSの質問に対して端的に答えている。

一方で、直前の質問に対して、その形式に合わせた形で端的に答えないこともしばしばある。その際、以下のように、応答の産出が期待されている位置に「그게」と「이게」という表現が用いられている。

【断片 1-1】 S&E\_190512\_3

- 5 E: 어. 나 집이야. 나 할 거 없어서 그냥 땡굴땡굴하고  
6        놀고 있었[어 가지구:::(화요일부터 )  
7 S:→               [너 언제 언제부터 가?  
8        (1.0)  
9 E:⇒ 나? .h 아니 나 진짜 하 그게:::(0.4)알 수가 없는데

【断片 1-1】は、【断片 1】の5行目以降のやり取りであり、7行目でSは、某大学病院に看護師として就職したEに、いつから出勤するかと尋ねている。それに対し、7行目でEは「나?」という聞き返しによって答えることを遅延させてから「.h 아니 나 진짜 하」と言っており、出勤時期について何らかの不満があることを表している。その後、Eは「그게:::」と発している。ここまで聞くと、Eは、Sの「いつ出勤するか」という質問に対して端的に「いつ」だとは答えていないことがわかる。そして、次の「알 수가 없는데」という発話により、Eは「いつ出勤するかわからない」ということに不満をもっていること、そして「なぜわからないか」についてこれから説明しようとしていることも示している。このように、直前の質問に対して端的に答えない際に「그게」という表現が用いられている。このようなことは「이게」に関しても言える。

次の【断片 2】は、元プロ野球選手のKと、元プロバスケットボール選手のHが参加しているYouTubeチャンネルの映像から抜粋したやり取りである。ここで注目したいのは、4行目のHの答え方である。

【断片 2】 YouTube 운동부 들어 왔어요(EP20\_03:27)

<https://www.youtube.com/watch?v=EbZCOcdRINQ>

[제주도 흑우집에서 고기 주문 후]

- 1 K:→ 형님 그럼 여기는: 제주도에서 지정돼 있는:
- 2 → 그 [흑우집인 거예요?
- 3 H: [hhh
- 4 H:⇒>그니까< 이게 흑우가? 이렇게 먹을 수 있는
- 5 흑우는: 따로 사육한다 그러더라구 농장에서.

1・2行目でKが、ここ(二人が来ている店)は濟州島で指定された黒牛の焼肉屋かどうかを尋ねている極性質問に対して、4行目でHは「はい」とも「いいえ」とも答えていない。Hは、4行目の冒頭で早いスピードで「그니까」と発し、自身の発話を直前のSの質問の形式に直接的に合致させていない。さらに、Hは「이게」と言ってから、黒牛についてH自身が聞いた話を語っている(4・5行目)。このように、「이게」も、「그게」と同様に、質問に対して端的な応答を産出しない際に用いられていることがわかる。

以上のことにより、「이게」と「그게」は、直前の質問に対して端的な応答を行わない際に、質問の受け手によって選択されていると言える。では、質問の受け手は「이게」と「그게」をどのように使い分けているのだろうか。以下では、「이게」と「그게」のそれぞれが含まれている応答がどのような環境で産出されているか、そしてその応答がいかに展開されているかを詳細に分析する。その分析を通して「이게」と「그게」が相互行為を組織する上でどのような機能を担っているかを明らかにする。

#### 4. 応答の位置に用いられる「그게」

まず、応答が期待されている位置に用いられている「그게」から見てみる。質問の受け手が「그게」を用いて答える場合の特徴は、次の2つである。まず、質問の受け手は、直前の質問により要求されている情報を端的に提供していない。もう一つは、それにも関わらず、最終的には、質問に対する「応答」として理解できる情報を産出している。

次の【断片 1-2】は、前節の【断片 1-1】で提示した S と E の会話で E の応答をすべて示したものである。ここでは、E の応答が開始されている 9 行目からのやり取りにおいて、とりわけ「그게」からの E の応答がどのように展開されているかに注目する。

【断片 1-2】 S&E\_190512\_3

- 7 S: 너 언제 언제부터 가?  
8 (1.0)  
9 E:⇒ 나? .h 아니 나 진짜 하 그게:(0.4)알 수가 없는게  
10 처음에는 8 월달 입사라고 했거든?  
11 S: 어:.  
12 (0.6)  
13 E: 근데: 다른 사람들은 막 이제 들어가는 거를:::(0.4)  
14 그 단톡이 있단말이야:[그 ○○대:::(○○:대학명))  
15 S: [응-.  
16 S: 응응응.  
17 E: >그래서< 그 단톡에(.)누-(.) 몇- 몇 명이 들어가구  
18 이런 걸 다 알려줘 가지구::  
19 S: 어어어.  
20 E: 막 그걸 보고 있는데::: .hhh 나는 뭐 거의: 지금  
21 보면 한 열-11 월달?(.)막 이때 들어갈 거 같애.  
22 늦[게( )  
23 S: [11 월?  
24 (0.5)  
25 E: 응.(.)아 되게 이상해..hhh

9 行目の冒頭で E は、出勤時期について不満があることを表してから「그게」と言っている。ここでは、E が、7 行目で S の「언제」という疑問詞により求められている情報、具体的には「언제부터」なのかは端的に提供していないことがわかる。その代わりに、E は「그게」と言って、前方に照応した形で直前の質問に対応していくことを予示している。また、0.4 秒の間合いの後、E は「알 수가 없는게」と発し、これから「いつから出勤するか」について正確に答えられない

理由を説明することも予期させている。このような E の発話(9 行目)の組み立てから、その理由が何らかの形で説明されるまで E の発話ターン(turn)は終わらないということが理解できる。

その後、10 行目で E は、以前言われていた入社時期(8 月)を言ってから、13 行目で「근데」という逆接を表す接続詞を用いて、その時期にはならないことを表している<sup>3</sup>。その上で E は(就職先の)大学病院に就職した他の人たちの入社状況(13 行目)を確認できるグループチャットがあつて(14 行目)、そこを通じて何人が入社したかを知ることができる(17・18 行目)。そして、それを見ているが、E 自身はどうも 11 月頃に入るようだと言っている(20・21 行目)。ここで重要なのは、21 行目の E の発話、すなわち「나는 뭐 거의: 지금 보면 한 열-11 월달? ()막 이때 들어갈 거 같애。」が、7 行目の S の「너 언제 언제부터 가?」という質問に対する応答として理解できるという点である。質問者の S も、23 行目で「11 월」を強く発して聞き返し、E の確認を求めることで、21 行目における E の発話、とりわけ「11 月」を自身の質問に対する応答として理解していることを示している。

以上のように、E は、「그게」という表現によって直前の S の「いつから出勤するか」という質問に対応することを予示しつつ、就職先のグループチャットから確認できた現在の入社状況を説明してから、最終的に、S の質問に対する応答として理解できる情報(現在の状況から予想される入社時期)を産出することでターンを完結させている。

次の【断片 3】でも、相手の質問に対して端的には答えられない事情があり、その事情を説明するにあたって「그게」を用いている。この例でも、最終的には質問の応答として理解できる情報が産出されている。

【断片 3】は、J(40 代、女性)が、大学院の後輩の Y(30 代、女性)に折り返しの電話をかけて交わされた会話である。【断片 3】の直前で Y の用件についての話はすでに終わっており、1 行目の J の質問は、その用件とは別件である。この 1 行目の「그-(0.3)아오키 선생님은 해결됐어?」という J の質問は「(電話当時の)翌年に予定されている韓国の某学会の世界学術大会に、その学会の元会長だった先生(박성현 교수님、以下、朴先生)が J の指導教員の青木先生を基調講演者として招待しようとしている」という両者の共有されている内容を受けて発されている。それと同時に、その招待に何らかの問題が生じていることを事前に Y から聞いて

---

<sup>3</sup> E と S の電話会話は 5 月に録音されたものである。



知っていた J が、その問題が解決されたか否かを、当時朴先生と連絡を取り合っている Y に尋ねている。

このような J の質問は、肯定／否定で答えることを要請するものである。それに対して Y は、3 行目の冒頭の「.h ㅏ:: 그계::」という言い方からわかるように、肯定も否定もしていない。Y はとりわけ「그계」という表現を産出することで、J によって質問されているアジェンダ(青木先生の招待の件)については、これから対応するというスタンスを示している。結論から言うと、Y は、朴先生の話を引き用しながら、最初の基調発表からスペシャルトークという形で青木先生を招待することになったと語っている(58～73 行)。

【断片 3】 Y&J\_190326\_09:35

- 1 J:→ 그-(0.3)아오키 선생님은 해결됐어?  
2 (0.8)  
3 Y:⇒ .h ㅏ:: 그계:: 갑자기 박성현 선생님이  
4 오늘 연락 와서?  
5 J: >응[응.<  
6 Y: [.hh  
7 J: 먼[저 아오[키 선생님한테(.)얘기했던 거 아니야?  
8 Y: [뭐:: 그  
9 (0.4)  
10 J: 내년애 [오시기로.  
11 Y: [얘기해 버렸어요. 벌써:: 네. 내년애:  
12 .hhh 그런 얘기를 박성현 교수님이 할 꺼라고::  
(9 행 생략:Y 가 아오키 선생님께서 기조발표에 관련해서 메일을 보냈다는  
내용과 아오키 선생님의 답장 내용에 대해서 이야기 함))  
22 Y: 그래서 그[거를 오늘 얘기했어요:: 그랬더니?  
23 J: [응.  
24 J: [응.  
25 Y: [.hh 박성현 교수님이 지금 회장이 아니에요::  
26 2 년만 하시구?  
27 J: 응응[응.  
28 Y: [다음 회장님한테 넘어갔거든요[:.=근데 그=

- 29 J: [응응응.
- 30 Y: =회장님이,h[h 박성현 교수님이 뭐 일본사람=
- 31 J: [응.
- 32 Y: =구해 놓으라 했는데 박성현 교수님이 아n- 아무  
33 답신이 없어 가지군.;
- 34 J: 응.;
- 35 (0.4)
- 36 J: 그 사람이 구한 거야?
- 37 (0.7)
- 38 Y: 어예. 그 사람이 구해 버린 거예요.
- 39 J: [he:: 어떡해.
- 40 Y: [그래가지구 .hhh 박성현 교수님이 당황해가지고  
41 오늘::막 저한테 아니 어떻게 막 화가  
42 나가지고::[.hh 그 회장은 어떻게 그럴 수 =
- 43 J: [응응응.
- 44 Y: =있냐고:: 내가 대답 안 했다고 딴 사람  
45 구해 놔 버렸다[고:::
- ((12 행 생략: J 와 Y 가 현재 학회 회장의 행동에 대해 이야기 한 후, Y 가 박선생님과 이야기 한 내용을 인용함))
- 58 Y: .hh 박성현 교수님이 또 막 따지셨나 봐요 그 정도  
59 돈은 있지 않냐고 학회에::
- 60 J: hhhh[h.h h
- 61 Y: [한 분 더 (.)[초대해서:: 그렇게 되면은
- 62 J: [어.
- 63 Y: 사회언어학은 그 사람이 하[고,hhh 아오키 교수님은  
64 그러면은 .hh 일본의 회화분석 연구에 대해서  
65 국한 돼서::
- 66 J: 안, 그[것도 좋다.=차라리 회화분석이 낫겠]다.(.)[그치.
- 67 Y: [하자고: 스페셜 토크로::]
- 68 (0.3)
- 69 Y: [네. hh 그래]서 회화분석(.)연구에 대해서 스페셜=  
70 J: [사회언어학 보다.]

- 71 Y: =토크식 형식의[로, .hh 약간:: 기조 발표까지는=
- 72 J: [오>오오오오<
- 73 Y: =아닌데, [약간.hh 스- 스페셜 토크,
- 74 J: [어어.
- 75 Y: 이런식[으로:::hh (뭔가)하자고::]:.
- 76 J: [아:그래도 초대되는 거지.(.)그럼.]
- 77 Y: 네. 그래서::[그 비용은 다 나올 거예요.
- 78 J: [음. 다행이네].

さて、上記のような結論(スペシャルトークに変わったという話)の前では何が起きているのか。まず、3・4行目でYは「그게」の後、「갑자기 박성현 선생님이 오늘 연락 와서?」と言って、これから朴先生からの連絡の用件を語ることを予告している。その話は、7・10行目におけるJの「青木先生には来年韓国に行くことになったともう伝えたのではないか」という確認要請によって一旦中断され、それに対するYの確認が与えられる(11・12行目)とともに、それに関連したYの話が続く(中略された13~21行目)。そして、3・4行目で予告されていた「朴先生の連絡用件」は、22行目の最後の「그랬더니?」から再開されているように見えるが、その再開を一時的に止めてYは朴先生の話伝えるにあたって必要な背景情報(「現在の学会の会長は朴先生ではなく、他の人である」こと)をJに説明している(25~28行目)。その後、Yは、現会長と朴先生との間にあった出来事を述べるとともに、今日朴先生がY自身に連絡してその出来事に怒っていたと語っている(28行の最後~45行目)。この語りにより、3・4行目で開始されていたYの朴先生の連絡用件についての語りが一段落されていることが理解できる。一方で、1行目のJの質問(「青木先生の発表の件で生じている問題が解決できたか否か」)にはまだ答えていないこともわかる。

その答えと聞きうる発話は、58行目から77行目にかけて産出されている。詳しく見てみると、まず、58~61行目でYは「朴先生がもう一人を招待する程度のお金は学会にあるのではないかと現会長に文句を言った」と伝える。そして、61~67行目では、朴先生が現会長に提案した内容、すなわち「社会言語学については現会長が招待した人が発表し、青木先生は会話分析に限定してスペシャルトークにしよう」という内容を伝えている。そして、その朴先生の提案に対してJが「아, 그것도 좋다.=차라리 회화분석이 낫겠다.」という評価を述べてから、最後

に「그치.」と言ってYに同意を求める(66行目)と、Yは「네.」と同調してから(69行目の冒頭)、直前の朴先生の提案内容をまとめている(69～73行目)。

このような朴先生の提案は、1行目で「青木先生の招待についての問題が解決されたか否か」を質問していたJによって、その問題についての解決策として理解されている。詳述すると、73・75行目のYの「스페셜 토크.이런」まで聞いて、Jは「아.」と反応し、新たな情報として受け止めてから「그래도 초대되는 거지.(.)그럼.」と言って「招待という形には変わらない」ことについての確認をYに求めている(76行目)。そしてYが肯定の反応をする(77行目)と、Jは「다행이네.」という評価(78行目)によって青木先生の招待の問題は解決されたという理解を示している。

ここまでの【断片3】の分析を通して次のことが言える。すなわち、肯定／否定の応答が要請されているJの質問に対し、Yは、まず「그게」と発し、端的に「肯定／否定」という形で答えられないことを示しておき、次に青木先生の招待の問題を解決する上で紆余曲折があったことを朴先生とのやり取りを引用しながら語っている。そして最終的に当該の問題がどのように解決されたかを述べることで、「그게」で開始した発話ターンを終わらせている。

本節の【断片1-2】と【断片3】の分析をまとめると、「그게」という表現は、応答者が、直前の質問に対してすぐには、端的に答えられない事情があり、その事情を語った上で、相手の質問への答えとなる情報を提示する際に用いられていると言える。言い換えれば、そのような応答を組み立てる際に、「그게」という表現を用いることで応答者は「先行する質問にすぐには端的に答えられない事情を伴うが、それでも答えることには取り組む」というスタンスを、応答の早い時点で標示しているということである。

## 5. 応答の位置に用いられる「이게」

次は、応答が期待されている位置に「이게」が用いられている事例を見てみる。質問の受け手が「이게」を用いて答えるときの特徴は、次の2つである。まず、質問の受け手が、直前の質問および相互行為の焦点に合致しない応答を産出している。もう一つは、当該の質問および相互行為に関連して受け手自身が直接的に得た情報および知識を用いて質問に答えている。

【断片 2-1】は、第3節ですすでに示した【断片 2】に加えて5行目以降のやり取りも提示している。1行目でKは「선배님」と言い、隣に座っているHに向けて発話を開始していることを公然化し、現在二人が来ている店が济州島で指定された黒牛の焼肉屋であるか否かを端的に尋ねている<sup>4</sup>(1・2行目)。

【断片 2-1】 YouTube 운동부 들이 왔어요(EP20\_03:27)

<https://www.youtube.com/watch?v=EbZCOcdRINQ>

[K 와 H 가 제주도 흑우집에 들어와서 고기를 주문한 후

K 가 질문하는 화면으로 바뀜(1 행)]

1 K:→ 선배님 그럼 여기는: 제주도에서 지정돼 있는:

2 → 그 [흑우집인 거예요?

3 H: [.hhh

4 H:⇒ >그니까< [이게] 흑우가? 이렇게 먹을 수 있는 흑우는:

5 따로 사육한다 그러더라구 농장에서.

6 S: 어:.

7 H: 그러구 예전에:부터 있던 그 흑우는? 천연기념물이라

8 우리가 먹을 수 가 없고:.

9 S: 음:.

10 H: 그렇게 얘기를 하시더라구.

((주문한 음식이 나와서 흑우 얘기는 종료))

その質問の受け手であるHは、1・2行目のKの質問が完了される前、すなわち「여기는: 제주도에서 지정돼 있는:」くらいまで聞いて、息を吸い始めて反応を開始する準備をしている(3行目)。その後、4行目の冒頭でHは、早いスピードで「그니까」を発し、直前のKの質問に対する何らかの逸脱をマークする(Kim, 2013)。そうすることでHは、Kの質問に対して「肯定/否定」という形で端的に

<sup>4</sup> 1行目でKは「그림」という接続表現によって、現在の質問が前の何らかの発話および会話を踏まえていることを示しているが、それが何なのかは(編集されている可能性もあり)映像から特定できない。

答えないことを明らかにする<sup>5</sup>。そして、Hは「이게」という表現とともに、上昇調で「흑우가?」と言っている<sup>6</sup>。

Hは、Kの極性質問に対して肯定／否定の応答の産出が求められている位置で、上で述べたように、まずは「그니까」という表現によって、端的に答えられないことを明らかにしている。その上で「이게」により、何かの対象について今から説明していくことを予告している。その説明の対象は、次の「흑우가?」という発話から明らかになる。ここまでの発話を聞くと、Hが、直前のKの質問における焦点、すなわち「この黒牛の焼肉屋」を(それに関連する)「黒牛」に変えていることが理解できる。

このように焦点を「黒牛」に変えつつ、それについての説明を、他人に聞いて得た情報・知識に基づいているものとして組み立てている。詳しく見てみると、Hは「흑우가?」の後「요렇게 먹을 수 있는 흑우는: 따로 사육한다 그러더라고 농장에서.」と言って(4・5行目)、「黒牛」について他の人から(おそらく濟州島の地元のお店で)H自身が直接的に聞いた情報を提示している<sup>7</sup>。また、Hは「그리구 예전에:부터 있던 그 흑우는? 천연기념물이라 우리가 먹을 수 가 없고:」と言って「昔からの黒牛」について H 自身がもっている知識を付け加えている(7・8行目)。それとともに、その知識も人から聞いて得たことを明らかにしている(10行目の「그렇게 얘기를 하시더라고.」)

以上のことをまとめると、Kは、応答の産出が期待されている位置で、まずは、先行のKの質問における焦点に合致させないことを「그니까」という表現によってマークしている<sup>8</sup>。その後、「ここの黒牛の焼肉屋」ではなく、それに関連してい

<sup>5</sup> 韓国語会話で「그니까」は、発話を再構成(reformulation/reshaping)することを表すマーカースとして使用されていることが明らかになっている(Kim & Suh, 1994, Kim, 2013)。このような再構成という観点を踏まえると、肯定／否定の応答が期待される位置で H は「그니까」で自身の発話を再構成すると標示することで、直前の K の質問に対して何らかの(形式的、あるいは内容的な)抵抗を示していると言える。

<sup>6</sup> ここの「이게」は指示表現ではないことを確認しておこう。テーブルの上には何もおいておらず、Hも指で何かを指すようなふるまいもしていない。

<sup>7</sup> 4行目でHは、Kを見ながら「>그니까< 이게 흑우가?」を言って「요렇게」から最後の10行目の説明までは前方のスタッフ(S)を見ながら発している。そのため、6・9行目ではSが反応している。Kは、応答者のHのほうを見ている。

<sup>8</sup> このように、Hが、Kの質問に対して焦点をずらして答えているのには、次のような理由があるように思われる。それは、Kの質問に含意されている「濟州島で指定されている黒牛の焼肉屋がある」という前提に問題があるからである。つまり、Hの説明からもわかるように「天然記念物と指定された黒牛はそもそも食べられない」ため、Kの質問の前提に合致する応答ができないのである。

る「黒牛」について、H 自身が直接的に得た情報および知識をもとに説明している。その説明にあたってHは「이게」という表現を用いているのである。このことを踏まえると、「이게」という表現は、Hが、Kの質問に関連している「黒牛」について、H自身が直接的に得た情報および知識をもとに説明することで、当該の質問に対応する際に用いられていると言える。

次に取り上げる【断片4】は、「理由説明を要請する」質問に対して、その説明の提示が期待されている位置で「이게」が用いられている事例である。ここでも、応答者は、理由説明を、応答者自身の直接的に得た情報に基づいて提示するにあたって「이게」を産出している。

#### 【断片4】 알쓸범잡 2(06:14)

[https://www.youtube.com/watch?v=nDo\\_1P8b\\_8](https://www.youtube.com/watch?v=nDo_1P8b_8)

[전 화면에서는 프로파일러(P)가 범 죄자 면담 당시의 상황을 설명하고 있음]

- 1 H: 그니까 죄의식이나 뭐 어떤 그런게 하나도 없는 거죠?
- 2 P: 없었어요. 근데 대화를 나누고 나서?: 분석한 결과는
- 3 사이코패스는 아닌 것으로 저는: 일단은 면담의 결과를
- 4 보고서로 작성을 했습니다.
- 5 H: 네.
- 6 P: 나중에 검사 결과도, .hhh 이십::점 정도이기 땀에:
- 7 사이코패스::간 높지는 않다는 결과가 나오기는
- 8 했습니다[만:
- 9 Y:→ [히 근데 어떻게 그럴 수 있을까요.
- 10 P:⇒ >그니까< 이게 뭐냐면,(1.0)어릴 때부터 성장 배경을
- 11 쪽:들어보니까,(0.4)사회적인 학습을 경험할 기회가
- 12 전무했었어요.
- 13 A: 음::
- 14 P: 어떤 일이 발생했을 때 내가 어떻게 대처해야지: 뭐
- 15 이런::성장하면서 우리가 조금씩 배워가는 사회화 과정이
- 16 너무:: 없었기 땀에: 그:: 상황이 됐을 때? 대처할 수
- 17 있는 합리적인 방법 (0.5)을 자기가 못 찾고 그냥 계속
- 18 훼손만 하고 있었던 거죠.

【断片 4】は「知っておくと役に立つ犯罪雑学辞書」という韓国のテレビ番組のなかで、2022年1月に放送された番組から抜粋した会話である。この番組は、一人の司会者と、5名のパネル(プロファイラー、弁護士、化学者、小説家、映画監督)がテーブルを囲んで座って、過去に起きた事件について議論する番組である。

【断片 4】のやり取りの直前では、プロファイラー(P)が、2012年に起きたある事件の犯人と面談したときの様子を語っており、それを聞いていた司会者の H が、

【断片 4】の1行目で P に向けて「그니까 죄의식이나 뭐 어떤 그렇게 하나도 없는 거죠?」という確認要請の質問をしている。それに対して P は「없었어요.」と端的に答えてから、犯人と面談した後、P が報告した分析結果について話している(2~4行目)。続けて P は、サイコパス診断結果についても述べている(6~8行目)。

司会者の H は、9行目の P の診断結果を述べる発話が完了されると聞きうるところで「허」と発し憤りを表してから、P を見ながら「근데 어떻게 그럴 수 있을까요.」という質問を行っている。この質問は、単なる情報を求めているものではない。その組み立て方を見ると、H は、直前の P の「犯人はサイコパス度が高くない」という診断結果を「근데」という接続表現によって踏まえた上で「어떻게 그럴 수 있을까요.」という発話を用いて、犯人の行動に対して信じられないというスタンスを示すとともに、視線を P に向けることで専門家である P の意見を尋ねている。まとめると、9行目で H は「サイコパス度は高くないのに、なぜそういう(残酷な)ことができたか」という疑問に対する「理由説明」を P に求めているということである。

以下では、P がどのように反応しているかに注目する。まず、10行目で P は「그니까」を早く言って、先行する H の理由説明の要請に対して一旦逸脱をマークし、P 自身の発話を仕切り直している<sup>9</sup>(Kim & Suh, 1994, Kim, 2013)。それと同時に、P は「이게 뭐냐면.」と発し、直前の H の理由説明の要請に対して、何らかの理由を提示すると予告している。

さて、P は「이게 뭐냐면.」の後、どのような理由を提示しているだろうか。まず、10行目の 1.0 秒の間合いを挟んで、P は「어릴 때부터 성장 배경을 쫓아 들어보니까.」と言って、面談当時、犯人から直接聞いた「小さい頃からの成長過

<sup>9</sup> ここで P は、H の質問を聞きたいなや、視線を H から逸らして下の方に移しながら 10行目の「그니까」を産出する。それと同時に、両手もテーブルの下から上に移している。このような身体的ふるまいから、P が、直前の H の説明要請に対して自身の発話だけでなく姿勢も仕切り直してことがわかる。



程」から導かれた・分析された結果を提示することを予告している。続けてPは「사회적인 학습을 경험할 기회가 전무했었어요。」という分析結果を提示している(11・12行目)。この分析結果は「社会化の欠如」に焦点が当てられているがゆえに、犯人の残酷さの理由としても理解できる。そして、13行目で弁護士(A)の納得を表す反応(「음::」)の後、14~18行目でPは、直前で述べていた犯人の残酷さの理由(「犯人の社会化過程の欠如」)についてより具体的に説明している。ここでは、Hの「犯人の残酷さの理由」についての説明要請に対して、Pが、直前まで焦点化されていた「犯人のサイコパス度(精神的な側面)」ではなく「犯人の社会化過程の欠如(社会的な側面)」をその理由として説明していることがわかる。さらに、その理由説明は、P自身が、犯人と面談する際に、直接犯人に聞いた成長過程を、プロファイラーとして分析した結果として述べられている。

以上のように、Pは、Hによって要請されている「犯人の残酷さの理由」を説明するにあたって、まずは「그니까」により、これからのP自身の発話が直前の相互行為(例えば、直前の「サイコパス度」の説明)を仕切り直すことをマークして、その残酷さの理由(すなわち「社会化過程の欠如」)を、当該の犯人から直接的に得た情報(成長過程)に基づいて説明している。そのような説明を開始する冒頭に、Pは「이게」を用いているのである。

ここまでの【断片2-1】と【断片4】の分析を通して「이게」という表現の使用について共通しているのは、次のことである。すなわち、当該の質問および相互行為に関連して応答者自身が直接的に得た情報や知識を用いて当該の質問に対応する際に「이게」が用いられていることである。このことから、「이게」は、先行する質問および相互行為と関連して応答者が直接的に得た情報および知識を用いて、当該の質問に答えるというスタンスを標示していると言える。

## 6. おわりに

本稿は、CAの手法によって「이게」と「그게」という表現が産出されている相互行為の環境を詳細に分析し記述することで、次のことを明らかにした。まず、応答の産出が期待されている位置で、応答者は、「그게」という表現を用いることで「質問者によって向けられた質問に端的に答えられない事情を伴うが、それでも答えることには取り組む」というスタンスを標示している。一方、応答の産出が期待されている位置で「이게」を産出することで応答者は、先行する質問およ

び相互行為と関連して応答者自身が直接的に得た情報および知識を用いて当該の質問に答えるというスタンスを標示している。

以上のような分析結果から、次のことが主張できよう。すなわち、質問に対して応答が期待されている位置に用いられている「이게」と「그게」という表現は、質問が向けられた応答者が、その質問に対してどのように応答を組み立てるかを、(早い時点で)予め質問者に示す働きをしている。

このような、相互行為における「이게」と「그게」の働きは、実際の会話のなかでそれらの表現が「質問-応答」という具体的な相互行為の環境において会話参加者によってどのように用いられており、いかに理解されているかを丹念に分析することによって導き出された知見である。このような知見を、韓国語教育、特に会話教育の現場で活用するとしたら、先行研究に基づいた説明(例えば、「ためらい」や「(思考中の)時間稼ぎ」という機能があるという説明)よりも、より具体的に、より言語使用者の視点からの説明を(学習者に)与えることが可能であろう。換言すると、会話教育において常に求められる「実際の使い方」および「自然な使い方」を学者者に教えるためには、本稿のように、実際の会話を、会話参加者の視点から捉え直し分析する研究を蓄積していく必要があるということである。

今回は、情報を求める質問の応答の位置に用いられる「이게」の事例が少なかったため、「이게」については綿密かつ十分な分析ができなかった。今後は、「이게」の事例をさらに収集し分析することで、両表現の使い分けについての記述をより精緻化していく。それとともに、「質問-応答」の連鎖以外の環境で使用されている事例も分析することで、それらの表現の相互行為的な働きを検証していく。

## 参考文献

- 金銀淑(2011)「談話標識としての「それが」と「 그게」」『日本語文学』55, pp.1-24. 일본어문학회  
串田秀也・平本毅・林誠(2017)『会話分析入門』 勁草書房  
高木智世・細田由利・森田笑(2016)『会話分析の基礎』 ひつじ書房  
好井裕明・山田富秋・西阪仰編(1999)『会話分析への招待』世界思想社  
Schegloff, Emanuel, A., & Lerner, Gene H. (2009). Beginning to respond: Well-prefaced responses to Wh-questions. *Research on Language and Social Interaction*, 42(2), pp.91-115.  
Kim, Hye Ri Stephanie (2013). Reshaping the response space with *kulenikka* in Korean conversation. *Journal of Pragmatics*, 57, pp.303-317.  
Kim, Kyu-hyun and Suh, Hyung-Hee (1994). The discourse connective “*nikka*” in Korean Conversation. In Akatsuka, N. (Ed.), *Japanese/Korean Linguistics*, 4, pp.113-129. CSLI, Stanford.  
Raymond, Geoffrey (2003). Grammar and social relations: Yes/No interrogatives and the Structure of Responding. *American Sociological Review*, 68(6), pp.939-967.

Sacks, Harvey, & Schegloff, Emanuel A. (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50, pp.696-735.

Schegloff, Emanuel, A. (2007). *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.

(筑波大学 グローバルコミュニケーション教育センター)  
hjkwon12@gmail.com

## 転写記号

[	発話の重なりの開始位置.
]	発話の重なりの終了位置.
(m.n)	間合いの秒数.
(.)	0.2 秒以下の短い間合い.
::	直前の音が延ばされている.
=	2つの発話が密着している.
. hh	吸気音. 息継ぎや笑いを表す.
hh	呼気音. 笑いを表す.
<u>文字</u>	下線部分が強調されて発話されている.
.	直前の部分が下降調抑揚である.
,	直前の部分が継続を示す抑揚である.
?	直前の部分が上昇調抑揚である.
(文字)	聞き取りが難しい発話.
>文字<	顕著に速く発話されている.
≡文字≡	笑い顔で発話されている.

---

## 韓国語教育研究 (第12号)

2022年9月15日 発行

---

発行者 文 嬉眞

発行所 日本韓国語教育学会

〒577-8052 大阪府東大阪市小若江3-4-1  
近畿大学 国際学部 酒匂康裕 研究室気付

編集者 『韓国語教育研究』編集委員会  
文慶喆、李相穆、柳朱燕、金珉秀、  
金昌九、權恩熙

印刷所 株式会社 仙台共同印刷

---